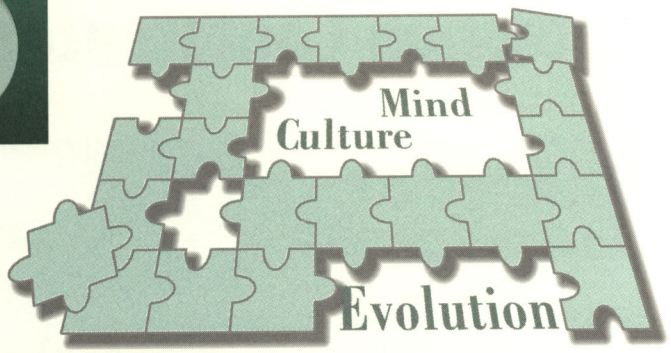
Hokkaido University CEFOM/21

Newsletter

Nov 2,2004 4

21世紀COE
心の文化・生態学的基盤に関する研究センター

北海道大学大学院文学研究科・教育学研究科



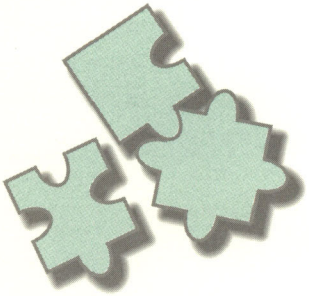
CONTENTS

第1回UBCサマーシンポジューム開催 1
2 3 4 5
2004年度研究成果 6
7 8
お知らせ 8

第1回 UBCサマーシンポジューム開催

"The Mind, Culture, and Evolution Conference"

ブリティッシュコロンビア大学（UBC，カナダ）において、7月15日から17日まで、"心の社会性"を文化・進化・およびそれらの統合的視点から解明する研究を行っている、第一線で活躍中の研究者を講演者として、CEFOM/21—ブリティッシュコロンビア大学（UBC，カナダ）共催第1回UBCサマーシンポジューム"Cultural and Ecological Foundations of the Mind"を開催しました。文化心理学者、社会心理学者、進化心理学者、社会生物学者、行動生態学者からなる講演者たちの間で活発な意見の交換が行われました。また若手研究者を中心としたポスター発表が行われ、第一線で国際的に活躍中のパネリストと直接に議論を交わすという貴重な機会を若手研究者が持つことができました。次のページに、パネリストの略歴と、それぞれ70分にわたる講演と質疑応答の内容を紹介します。さらに詳しい情報は、CEFOM/21のウェッブページhttp://lynx.let.hokudai.ac.jp/COE21/およびブリティッシュコロンビア大学のウェブページhttp://cmc.psych.ubc.ca/ubcmindconf/に紹介されていますので、そちらをごらんください。

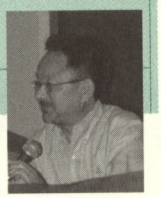


第1回 UBCサマーシンポジューム
The Mind, Culture, and Evolution Conference

第1日目
文化心理学

Cultural Affordances for Independent and Interdependent Selves

北山　忍



北山忍教授（Department of Psychology, University of Michigan, USA）は特に日米（東洋・西洋）における認知の文化差などに関する文化心理学の研究を行っています。今回の講演では、心理学実験により、西洋人と日本人との間に存在する心理傾向の相違を研究した結果を発表しました。相互独立的自己観をもつ西洋人は他者に自己の影響を与え、個人的な達成を追及する傾向が強いのと対照的に、相互協調的自己観をもつ日本人は他者に自己を調和させ、共感を育むことを追及する傾向が強いことなどが報告されました。また、氏の最新の発達研究データから、4歳児には、その文化に特有の認知傾向はみられないが、5歳の時期を越えると明確なバイアスが見られはじめるという興味深い結果が報告されました。

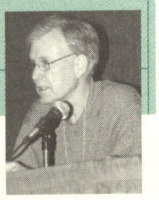
Considering Universality and Variability in Self-enhancement

Steven Heine

Steven Heine教授（Department of Psychology, University of British Columbia, カナダ）は相互独立的自己観および相互協調的自己観をもつ文化における自尊心（self-esteem）の文化心理学的研究を行っています。今回の講演では、相互独立的自己観の持ち主は自尊心を高揚させるように動機づけられている一方、相互協調的自己観の持ち主はむしろ自分の面子を失わないように動機づけられていることを発表しました。具体的には、西洋人（European-Canadian）は参加している実験の課題の遂行に成功しているとき（＝自己観の高揚につながるとき）熱心に課題を行い、反対に日本人は課題遂行に失敗しているとき（＝社会的期待に沿うことができず面子を失いそうなとき）課題遂行に熱心になる、などの実験結果が報告されました。

Culture and Point of View

Richard Nisbett



Richard Nisbett教授（Department of Psychology, University of Michigan, USA）は、西洋と東洋における推論や認知における文化差に関する研究を行っています。古代ギリシャでは農耕に適した豊かな土地が少なかったために、相互独立的な競争的自己観が西洋において発達し、対照的に古代中国では農耕に適した土地が十分に存在したため協力的で集団主義的な農耕文化が東洋において発達したのではないかと推測しています。今回の講演では、そのような文化差の一例として、「西洋人は矛盾・対立する二つの言説が存在すると、どちらの言説が正しく、どちらが誤りなのか判断しようとする傾向が強い」のに対し、「東洋人は、その二つの対立する言説をいかにして調和させるかを考えようとする傾向が強い」ことを示す実験結果などが発表されました。

Color Categories: Evidence for the Relativity Hypothesis

Debi Roberson

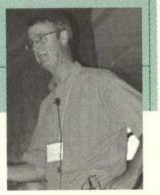
Debi Roberson教授（Department of Psychology, University of Essex、英国）は文化を反映し、また生み出す心理過

程に関する研究を行っています。今回の講演ではパプアニューギニアのBerinmo語を話す狩猟採集民の色彩認知に関する研究を発表しました。①英語圏では色彩に関して11種類のカテゴリーが存在するのに対して、その狩猟採集民（Berinmo話者）の間では5種類のカテゴリーしか存在しないこと、②Berinmo話者は青と緑とを同一のカテゴリーに分類する一方、明るい緑と暗い緑とを異なったカテゴリーに分類していることが報告されました。Roberson教授は、伝統文化における色のカテゴリー化は、植物の食用適性など過去の生活のために重要であった情報にもとづいて行われ、技術進歩によってそのような色のカテゴリーが変化していくのではないかと考えています。

第2日目
進化心理学

How Potent Are the Critics Complaints about Human Sociobiology?

John Alcock



John Alcock教授（Department of Biology, Arizona State University, USA）は社会性昆虫の研究や、人間行動の社会生物学的研究を行っています。2001年に"The Triumph of Sociobiology"（邦訳「社会生物学の勝利」長谷川 真理子・訳、新曜社、2004年）を著し、エドワード・O・ウィルソンによって提唱された社会生物学（人間や動物の社会行動および社会構造を進化生物学の視点から統合的に理解することを目的とする学問。行動生態学の知見を主な基盤としており、最近では進化心理学と重なる部分も多い）がその後さまざまな批判に応じながらどのように発展し、成長してきたかを論じました。今回の講演では、人間行動の社会生物学に関する批判をいろいろな角度から検討しました。

Sexual Conflict

David Buss

David Buss教授（Department of Psychology, University of Texas at Austin, USA）は性選択・性闘争に関する進化心理学的研究を行っています。進化理論によれば、男性と女性は、遺伝子を次世代に残す上で、対立する目的に直面しています。女性の側からすると、男性が（成年に達するまで時間がかかる）子供に投資し続ける長期的な関係を維持してくれると自分の遺伝子をより多く次世代に残せます。一方、男性の側からすると、そのような長期関係を結ばず、より多くの女性との（短期的）性的関係をもった方が、より多くの自分の遺伝子を次世代に残すことが可能になります。進化理論が予測するこのような傾向を人間がもっている証拠として、アメリカ人とドイツ人における質問紙調査の結果が報告されました。それによると、女性は、男性が（性的関係を結ぶために）長期関係を結ぶといううその約束をしたときに困惑するのに対し、男性は、女性が（長期関係を結ぶために）性的関係をむすぶといううその約束をしたときに困惑する傾向が強いというデータが報告されました。

Why are Homicide Rates so Variable Between Times and Places?

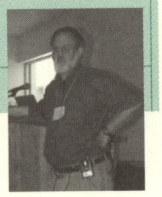
Margo Wilson & Martin Daly

Margo Wilson・Martin Daly両教授（Department of Psychology, McMaster University, カナダ）は、進化心理学的視点から殺人行動に関する研究を行っています。進化論的に考えると、繁殖可能性が低いとき、男性は厳しい性淘汰にさらされるため、男性間闘争が激しくなり、衝動的な暴力や殺人が多くなるはずだと考えられます。今回の講演で両教授は、①所得格差が大きい地域ほど殺人発生率が高い、②男性と女性とを比較した場合、（特に若年の）男性が殺人行動をとる頻度が高い、③殺人発生率の地域差は、進化論上の概念である「性淘汰」の影響によってよく説明される（繁殖率の個体間分散は一般に雄（男性）

の方が大きいため、若い男性において配偶者獲得のための競争が激しいので女性よりも若年男性のほうが衝動性・攻撃性が高い）などの研究成果を発表しました。

Can a Behavioral Ecological Model of Mood help to Explain Cross Cultural Differences in Rates of Depression?

Randolph Nesse

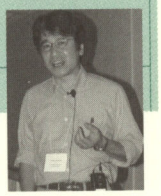


Randolph Nesse教授（Institute for Social Research, University of Michigan、USA）は抑うつの進化的な適応基盤の研究を行っています。生物学的要因と状況要因との両方が抑うつを引き起こすことはよく知られていますが、どのような状況要因が抑うつを引き起こすのか、またそもそも人間がなぜ抑うつになる生物学的素因を持っているのかはあまりよくわかっていません。Nesse教授は、抑うつを引き起こす状況において達成不可能な目標が存在することを指摘しました。このことから生物学的には、抑うつ気分が、人々に達成不可能な目標に向かう非生産的な努力を回避させるという適応的な機能をもっているのではないかと推測しています。この仮説から、人々が自分にとって大変重要であるが実現不可能な目標に向かわざるを得ないときに抑うつに陥るのではないかという提案を行いました。

第3日目
文化心理学と進化心理学の統合

Are Our Minds Fundamentally Egalitarian? Evolutionary Origins of Different Socio-Cultural Models about Distributive Justice

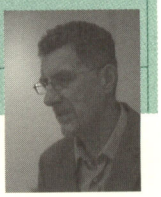
亀田　達也



亀田達也教授（行動システム科学、北海道大学）は人間の社会性の進化適応基盤をさぐる研究を行っています。今回の講演では「（資源の）分配」という規範がどのような基盤をもつのか、進化ゲーム理論的解析に基づいた研究の発表をしました。亀田教授は、進化ゲーム理論的シミュレーションおよび心理学実験の結果から、「資源の入手が不確実である」条件下で「資源の分配・共有がデフォルトの規範となる」という結論が導かれることを発表しました。例えば、アメリカ人の被験者においても日本人の被験者においても、実験室内で「不確実な予想外の（“たなぼた”式の）報酬（=“資源”）しか得られない」条件では報酬を他の実験参加者と共有しようとする傾向が強いのに対し、「期待した報酬が確実に手に入る」条件では報酬を共有する傾向がそれほど強く見られない、という実験結果が報告されました。進化ゲーム理論的シミュレーションによっても、「不確実性存在下では、資源共有という分配方法が最も安定して存在する」ことが示されました。また、文化心理学的観点に関しては、（高い/低い社会階級の人は、“たなぼた”式に得られた資源を他人と共有しようとしない/する、など）、ひとつの文化圏内の「さらにローカルな生態学的条件もまた人間の規範的行動に重要な影響を与える」ことを示し、（ローカルな条件を無視している場合が多い）従来の文化心理学的研究における問題点を指摘しました。

From Universal Mechanisms to Cultural Diversity: The Mind as a Coloring Book

Douglas Kenrick

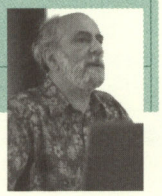


Douglas Kenrick教授（Department of Psychology, Arizona State University, USA）は進化心理学の研究を行っています。個体は遺伝子を次世代に多く残すような行動を選びやすいという進化論の原則から、（1）「若い女性のほうがより多くの健康な子供を残す可能性が高い→男性は若い女性に魅力を感じる」一方（2）「年上の男性のほうが子供に対する資源の投資を多く行うことができる→女性は年上の男性を好む」ことが予測され、これらの予測はデータによってもほとんどの場合支持されています。しかし、オーストラリアのTiwi族の人々など、若い男性が通常は年上の女性と結婚するという慣習をもつ集団もあります。今回Kenrick教授は、①Tiwi族の集団が一夫多妻である理由、また②Tiwi族の集団に「すべての女性は常に結婚しているべきだという規範が存在すること」の理由の説明を行いました。Tiwi族においては最も裕福な（高齢の）男性たちが最も

若い女性たちと結婚し、その男性が死亡した場合には、未亡人たちはより貧しい若い男性たちと結婚するということが知られています。そのため、(a)男性たちは初妻たちから資産を受け継ぎ、(b)その資産によってより若い、出産可能性の高い妻に投資し、子孫を多く残しています。(a)と(b)両方を可能にするためには、上記の①一夫多妻制と②すべての女性が誰かと結婚していなければならないという規範の二つの条件が必要であることがわかります。

The Interaction of Biology and Culture in the Domain of Food

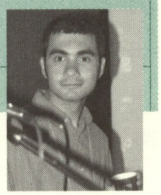
Paul Rozin



Paul Rozin教授(Department of Psychology, University of Pennsylvania, USA)は、食物の好みや嫌悪などに関する文化心理学的研究を行っています。Rozin 教授によると、人間の器官の多くは、食物の同定・獲得・消化・吸収・代謝を行うように進化してきたと考えられます。そのような進化的プロセスと並行して、文化的要因により、どの食物が耕作されるか、またどのように調理加工されるか、さらにどのようなときに、どのような理由で、どこで誰とどのような作法で食されるか、などが影響されます。このようにして形成された食文化が、人間の身体の生物学的条件に再び影響します。たとえば、アメリカ人は多量の嗜好品的な食物を手っ取り早く時間のかからない方法で消費することを好むという食文化が存在するため肥満傾向が強まるのに対し、フランス人は控えめな量の高品質な食物をゆったりとしたペースで消費することを好むため体型が比較的ほっそりとしている、といったことが知られています。

The Evolutionary and Cultural Landscape of Religion

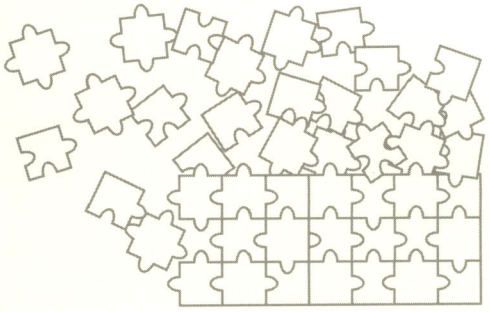
Norenzayan



Norenzayan助教授(Department of Psychology, University of British Columbia, カナダ)は宗教的信念などに関する文化心理学の研究を行っています。今回の講演では、人間が進化によって獲得してきた心理傾向が、いかに宗教によって巧妙に利用されているかという点に関して発表しました。Norenzayan助教授によると、人間の脳は、「ほとんどの点では普通であるが少数の細かい点ではとても奇妙である」物事を記憶しやすいようにできており、このような性質こそが多くの宗教的存在の特徴であると考えられます。たとえば、イエス・キリストは一方では普通の大工でありながら、どきどき水面上を自在に歩き回ったりするなどの奇妙で超越的な行為をします。また同様に、仏教における観音菩薩は(ほとんどの点では通常の)人間の身体を持ちながらも998本の腕があるという際立った特徴を持っています。Norenzayan助教授はさらに、進化的なプロセスの結果として「時間や自己、死といった対象に注意・興味が向けられやすい」という心理特性が人間の心に埋め込まれているので宗教的信念はこれからもしぶとく存在し続けるであろうという予測を行いました。

以上の各講演が終了した後、第三日目に、以下の研究者たちにより、文化心理学・進化心理学の統合などに関する活発な議論が交わされました。

- **山岸　俊男 教授**
  (行動システム科学・北海道大学)
- **Robert Boyd 教授**
  (Department of Anthropology, University of California at Los Angeles, USA)
- **Mark Collard 教授**
  (Department of Anthropology and Sociology, University of British Columbia, カナダ)
- **Hazel Markus 教授**
  (Department of Psychology, Stanford University, USA)
- **Mark Schaller 助教授**
  (Department of Psychology, University of British Columbia, カナダ)
- **Stephen Stich 教授**
  (Department of Philosophy, Rutgers University, USA)



2004年度研究成果

（事業推進担当者による研究業績）

■著　書

●亀田達也・村田光二（編著）（2004）.
現代の社会心理学　放送大学教育振興会

●Irimoto, T.（in press）.
The eternal cycle: Ecology and worldview of the reindeer herders of Northern Kamchatka. Senri Ethnological Reports, National Museum of Ethnology.

●Irimoto, T., & Yamada, T.（in press）.
Circumpolar ethnicity and identity. Senri Ethnological Studies, National Museum of Ethnology.

●金児曉嗣・結城雅樹（編著）（印刷中）.
文化行動の社会心理学　北大路書房

■分担執筆

●阿部純一（印刷中）.
認知科学
日本音楽教育事典　音楽之友社

●Adachi, M., & Chino, Y.（in press）.
Creative music making for everyone.
In S. Lau（Ed.）, Creativity: A moment of Aha! Hong Kong: The City University of Hong Kong Press.

●石黒広昭（印刷中）.
視聴覚機器を活用する: フィールドリサーチにおける視聴覚機器の利用
無藤隆他（編）ワードマップ「質的心理学」新曜社

●石井敬子（印刷中）.
文化と認識: 情報処理における言語・文化相対性
亀田達也・村田光二（編）　現代の社会心理学　放送大学教育振興会

●石井敬子・北山忍（印刷中）.
考え方、感じ方の文化心理学: 認知・感情の文化依存性
金児曉嗣・結城雅樹（編）　シリーズ21世紀の心理学3: 文化行動の社会心理学　京都: 北大路書房

●Irimoto, T.（in press）.
Anthropology of ethnicity and identity.
In T. Irimoto, & T. Yamada（Eds.）, Circumpolar ethnicity and identity. Senri Ethnological Studies, National Museum of Ethnology.

●Irimoto, T.（in press）.
Creation of the Marimo Festival.
In T. Irimoto, & T. Yamada（Eds.）, Circumpolar ethnicity and identity. Senri Ethnological Studies, National Museum of Ethnology.

●Irimoto, T.（in press）.
Preface.
In T. Irimoto, & T. Yamada（Eds.）, Circumpolar ethnicity and identity. Senri Ethnological Studies, National Museum of Ethnology.

●糸井重里・松井孝典・川勝平太・岩井克人・山岸俊男（2004）.
『智慧の実を食べよう:学問は驚きだ』ぴあ株式会社

●亀田達也・高野陽太郎（2004）.
結果の解釈ー実験結果の解釈を中心にー
高野陽太郎・岡隆（編）　心理学研究法　有斐閣

●Kameda, T., & Tindale, R.S.（in press）.
Groups as adaptive device: Human docility and group aggregation mechanisms in evolutionary context.
In M. Schaller, J. Simpson, & D. Kenrick（Eds.）, Evolution and social psychology. New York: Psychology Press.

●Kiyonari, T. & Yamagishi, T.（2004）.
Ingroup cooperation and the social exchange heuristic.
In R. Suleiman, D. V. Budescu, I. Fischer, & D. Messick（Eds.）, Contemporary psychological research on social dilemmas（pp. 269-288）.
Cambridge, UK: Cambridge University Press.

●Martignon, L., Foster, M., Vitouch, O., & Takezawa, M.（in press）.
Simple heuristics versus complex predictive instruments: Which is better and why?
In L. Macchi, & D. Hardman（Eds.）, The psychology of reasoning and decision making: A handbook. Chichester: Wiley.

●Ohnuma, S.（2004）.
Environmental commons game: Is the free rider a "Bad Apple"?
In R. Shiratori, K. Arai & F. Kato（Eds.）Gaming, simulation, and society: Research scope and prespective（pp. 19-26）. Springer Verlag.

●Ohtsubo, Y., Fujita, M., & Kameda, T.（in press）.
How can psychology contribute to designing a mixed jury system in Japan?: Ongoing debates and a thought experiment.
Progress in Asian Social Psychology（Vol. 4）.

●Radford, M.H.B. and Costello, K.（2004）.
Decision making across the Board: The Road to Group Think.
SA Director. Issue 10, 5

●Takahashi, N.（in press）.
Generalized exchange.
In G. Ritzer et al.（Eds.）, Encyclopedia of social theory. Sage.

●Takahshi T.（in press）
"Social memory, social stress, and economic behaviors".

●Takemura, K., Yuki, M., Kashima, E. S., & Halloran, M.（in press）.
A cross-cultural comparison of behaviors and independent /interdependent self-views.
Progress in Asian Social Psychology（Vol. 5）.

●Xiaomei, Y.（in press）.
Ethnic identity of tumed mongols in inner mongolia.
In T. Irimoto, & T. Yamada（Eds.）, Circumpolar ethnicity and identity. Senri Ethnological Studies, National Museum of Ethnology.

●山岸俊男（印刷中）　実験ゲーム　数理科学

■論　文

●Adachi, M., Trehub, S. E., & Abe, J.（in press）.
Decoding emotion in children's songs across age and culture.
Japanese Psychological Research.

●Cook, K. S., Yamagishi, T., Coye, C., Cooper, R., Matsuda, M., & Mashima, R.（in press）.
Trust building via risk taking: A cross-societal experiment.

2004年度研究成果

●Foddy, M., Platow, M., & Yamagishi, T. (submitted).
Group-based Trust in Strangers: Evaluations or Expectations?

●Hastie, R., & Kameda, T. (in press).
The robust beauty of majority rules in group decisions. Psychological Review.

●煎本 孝 (印刷中).
アイヌ文化における死の儀礼の復興をめぐる紛争解決、共生、行為主体　北海道大学大学院文学研究科紀要

●石黒広昭 (2004).
フィールドの学としての日本語教育実践研究　日本語教育(日本語教育学会), 120, 1-12.

●石井敬子・北山忍 (2004).
コミュニケーション様式と情報処理様式の対応関係: 文化的視点による実証研究のレビュー　社会心理学研究, 19, 241-254.

●亀田達也 (2004).
心の本質的社会性　基礎心理学研究, 22, 186-188.

●Kameda, T., & Hastie, R. (in press).
Building an even better conceptual foundation. Behavioral and Brain Sciences.

●Kameda, T. & Tamura, R. (2004).
"To eat or not to be eaten?" Collective risk-monitoring in groups. Submitted.

●Kameda, T., & Tindale, R. S. (2004).
Evolutionary/adaptive thinking as a meta-theory for systematic group research: An extended "fungus-eater" approach. Group Processes and Intergroup Relations. 7, 299-304

●Kashima, Y., Kashima, E. Chiu, C-Y., Farsides, T., Gelfand, M., Hong, Y-Y. Kim, U., Strack, F., Worth, L., Yuki, M. & Yzerbyt, V. (submitted).
Culture, essentialism, and agency: Are individuals universally believed to be more real entities than groups?

●Kashima, Y., Kashima, E. Chiu, C-Y., Farsides, T., Gelfand, M., Hong, Y-Y. Kim, U., Strack, F., Worth, L., Yuki, M. & Yzerbyt, V. (submitted).
Culture, gender, and self: Is women's sphere universally familial and men's sphere universally societal?

●Kashima, E. S. Halloran, M., Yuki, M. & Kashima, Y. (in press).
The effects of personal and collective mortality salience on individualism: Comparing Australians and Japanese with higher and lower self-esteem. Journal of Experimental Social Psychology.

●Kashima, Y., Kashima, E., Farsides, T., Kim, U., Strack, F., Worth, L., & Yuki, M. (in press).
Culture and context-sensitive self: The amount and meaning of context-sensitivity of phenomenal self differ across cultures. Self and Identity.

●Kiyonari, T., Yamagishi, T., Cook, K. S., & Cheshire, C. (in press).
Does Trust Beget Trustworthiness? Trust and Trustworthiness in Two Games and Two Cultures. Social Psychology Quarterly.

●Koshino, Y., Kinoshita, T., Radford, M.H.B. and Lin, K-M. (2004).
Utsubyou oyobi fuansyougai ni okeru bunka no eikyou. [Cultural impact of depression and anxiety disorders].
Nipponijisinpou [Japan Medical Journal], 4179, 27-32.} (In Japanese).

●Liu, J.H., Goldstein-Hawes, R., Hilton, D., Huang, L.L., Gastardo-Conaco, C., Pittolo, F., Hong, Y.Y., Dresler-Hawke, E., Ward, C., Abraham, S., Kashima, Y., Kashima, E., Ohashi, M., Yuki, M., & Hidaka, Y. (submitted).
The message of world history from psychological representations.

●牧村洋介・山岸俊男 (投稿中).
国籍カテゴリーを用いた集団間行動に関する実験研究

●真島理恵・山岸俊男・Michael Macy (印刷中).
信頼と協力に関する日米行動比較

●真島理恵・山岸俊男・松田昌史 (2004).
非固定的関係における信頼: シグナルとしての信頼行動　社会心理学研究, 19, 175-183.

●Masuda, T., & Kitayama, S. (2004).
Perceiver-induced constraint and attitude attribution in Japan and the US: A case for the cultural dependence of the correspondence bias. Journal of Experimental Social Psychology, 40, 409-416.

●Molm, L. D., Takahashi, N., & Peterson, G. (in press).
In the eye of the beholder: Procedural justice in social exchange. American Sociological Review.

●中根允文,Ballenger, J,越野好文,木下利彦,Radford,M.H.B., Lin K-M. (2004).
うつ病および不安障害における文化の影響。日本醫事新報第4179号, 27-32

●Nemeroff, C.B., Radford, M.H.B. and Golden, R.N. (2004).
Advances in the treatment of mood and anxiety disorders. CNS Spectrums, 9, Number 6 (Suppl 4), 5.

●西原進吉・菱谷晋介 (印刷中).
触知覚による空間関係処理と視覚イメージおよび大細胞系の関係
北海道心理学研究, 25(研究奨励賞受賞論文).

●Ohmura, Y. & Yamagishi, T. (submitted).
Why do people tolerate unintended inequity?

●Ohnuma, S., Hirose, Y. Karasawa, K., Yorifuji, K. & Sugiura, J. (in press).
How did residents accept a demanding rule: Fairness and social benefit as determinants of approval for a recycling system. Japanese Psychological Research.

●Radford, M.H.B. (2004).
Transcultural issues in mood and anxiety disorders: A focus on Japan. CNS Spectrums, 9, Number 6 (Suppl 4), 6-13.

●Radford, M.H.B. (2004).
Evolutionary and cultural perspectives in psychiatry: An integrative approach. Japanese Bulletin of Social Psychiatry, 13 (2), 97.

2004年度研究成果

●Shinada, M., Yamagishi, T., & Ohmura, Y. (2004)
False Friends Are Worse than Bitter Enemies: "Altruistic" Punishment of In-Group Members. Evolution and Human Behavior, 25, 379-393.

●Smith, P.B., Peterson, M.F., Schwartz, S.H., Ahmad, A.H.,Akande, D., Andersen, J.A., Ayestaran, S., Bellotto, M., Bochner, S., Callan, V., Davila, C., Ekelund, B., Francois, P-H., Graversen, G., Harb, C., Jesuino, J., Kantas, A., Karamushka, L., Koopman, P., Leung, K., Kruzela, P., Malvezzi, S., Mogaji, A., Mortazavi, S., Munene, J., Parry, K., Peng, T.K., Punnet, B.J., Radford, M., Ropo, A., Saiz, J., Savage, G., Sorenson, R., Szabo, E., Teparakul, P., Tirmizi, A., Tsvetanova, S., Viedge, C., Wall, C., Wang, Z.M. and Yanchuk, V. (In Press).
Demographic effects on the use of vertical ources of guidance by managers in widely differing cultural contexts. International Journal of Cross-Cultural Management.

●鈴木直人・山岸俊男 (2004).
日本人の自己卑下と自己高揚に関する実験研究　社会心理学研究, 20, 17-25.

●Takahashi, C., Kanazawa, S., Tanida, S., Kiyonari, T., & Yamagishi,T. (submitted).
Sex, attractiveness and cooperation in social exchange.

●Takahashi, T., Ikeda, K., Ishikawa, M., Tsukasaki, T., Nakama, D., Tanida, S., & Kameda, T. (2004).
Social stress-induced cortisol elevation acutely impairs social memory in humans. Neuroscience Letters, 363, 125-130.

●Takahashi, T. (2004).
Cortisol levels and time-discounting of monetary gain in humans. NeuroReport. 15 (13) :2145-2147

●Takahashi,T., Ikeda, K., Ishikawa, M., Kitamura, N., Tsukasaki, T., Nakama, D., & Kameda, T. (submitted).
Interpersonal trust and social stress-induced cortisol elevation

●Takemura, K., & Yuki, M. (submitted).
Competitiveness in Japan: A test of the interindividual-intergroup discontinuity effect in a "collectivist" society.

●田村亮・亀田達也 (査読中)
表情は伝播するのか?　一日本人参加者を用いた検討一
(【英語】 Tamura, R. & Kameda, T (submitted) Are facial expressions contagious in the Japanese? (in Japanese))

●田村亮・亀田達也 (2004).
「寡きを患えず,均しからずを患う」?: グループの意思決定におけるパレート原理の作用　社会心理学研究, 20, 26-34.

●谷田林士・山岸俊男 (2004).
共感が社会的交換場面における行動予測の正確さに及ぼす効果
心理学研究, 74, 512-520.

●寺井滋・森田康裕・山岸俊男 (投稿中).
選択的プレイ状況における信頼行動と協力関係:依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いた実験研究

●塚崎崇史・石井敬子 (2004)
認知における言語・文化相対性:
Sapir-Whorf仮説再考　心理学評論, 47, 173-186.
〔英訳: Tsukasaki, T., & Ishii, K. (2004). Linguistic-cultural relativity of cognition: Rethinking the Sapir-Whorf hypothesis. Japanese Psychological Review, 47, 173-186.〕

●塚崎崇史・亀田達也 (2004).
社会心理学におけるエージェント・ベースト・モデルの可能性:適応的視点と進化シミュレーション　理論と方法, 35, 37-51

●Wang, F., & Yamagishi, T. (in press)
Group-based trust and gender-difference in China. Asian Journal of Social Psychology.

●Yamagishi, T., Foddy, M., Makimura, Y., Matsuda, M., Kiyonari, T., & Platow M. (in press).
Comparisons of Australians and Japanese on group-based cooperation. Asian Journal of Social Psychology.

●Yamagishi, T., Kanazawa, S., Mashima, R., & Terai, S. (submitted).
Separating trust from cooperation in a dynamic relationship: Prisoner's dilemma with variable dependence.

●Yamagishi, T., & Matsuda, M. (submitted).
The role of reputation in open and closed societies: An experimental study of internet auctioning.

●Yamagishi, T., Terai, S., Kiyonari, T., Mifune, N., & Kanazawa, S. (submitted).
Managing errors in social exchange.

●Yoshino, I. & Abe, J. (in press).
Cognitive modeling of key interpretation in melody perception. Japanese Psychological Research.

●Yuki, M., Maddux, W. W., Brewer, M. B., & Takemura, K. (in press).
Cross-cultural differences in relationship- and group-based trust. Personality and Social Psychology Bulletin.

お知らせ

11月2日、本研究拠点プロジェクトリーダー・山岸俊男教授(文学研究科・行動システム科学)が社会心理学研究の成果により、紫綬褒章を受章しました。今回の受章に関する報告を次号のニュースレターで行います。また、現在、本研究拠点で進行中の研究や国際共同実験の近況なども合わせて報告します。

21世紀COE
"心の文化・生態学的基盤" 研究教育拠点

Hokkaido University EFOM 21

〒060-0810
札幌市北区北10条西7丁目
北海道大学文学研究科行動システム科学講座
TEL:011-706-3047
Email:cefom@let.hokudai.ac.jp
Homepage:http://lynx.let.hokudai.ac.jp/COE21/